

# DRESDNER PHILHARMONIE

Chief Conductor: Michel Plasson

1997 JAPAN









# Dresdner Philharmonie

Chief Conductor: Michel Plasson



JAPAN 1997

**CBC**

CBCオーケストラシリーズ #51



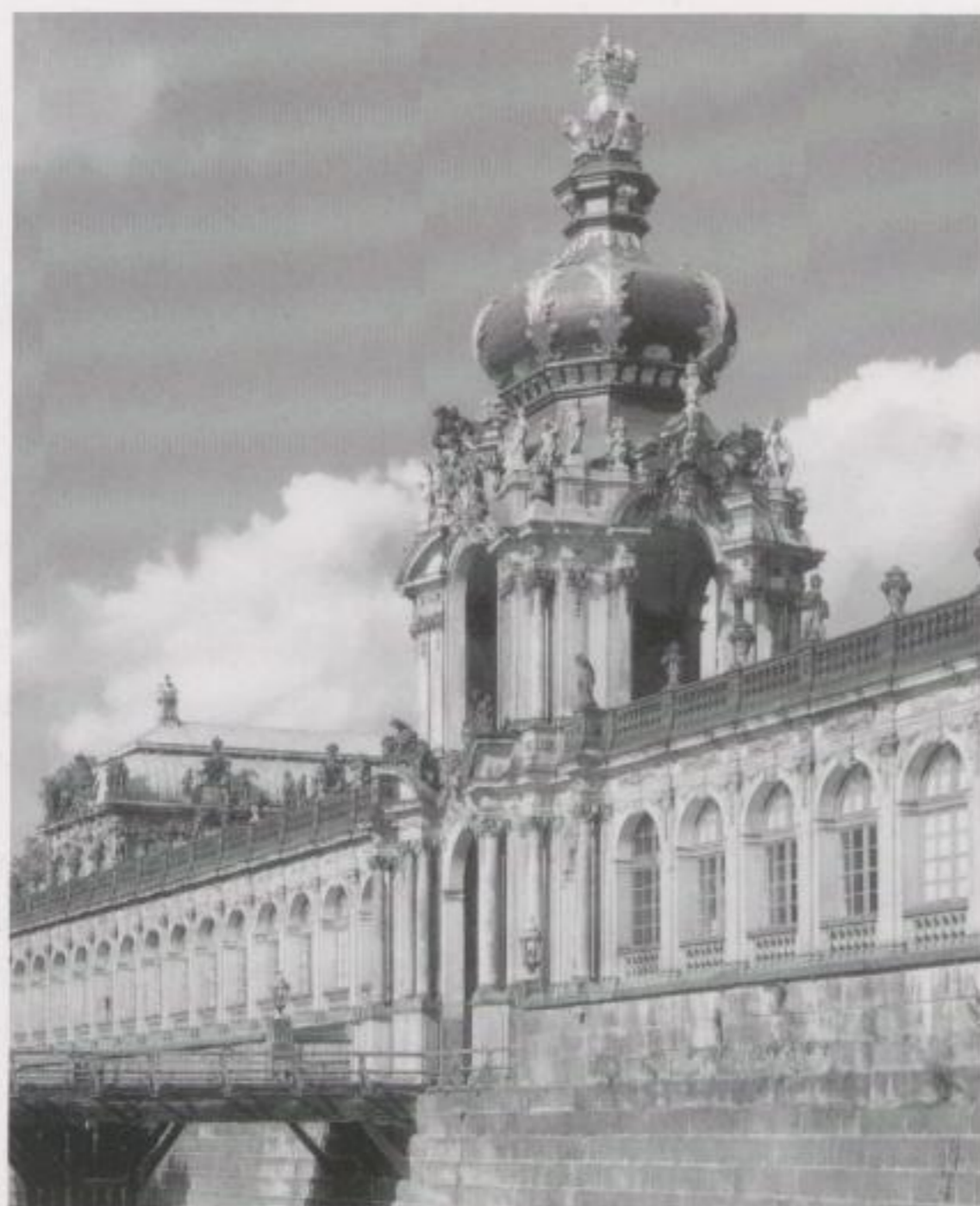
# DRESDEN





DRESDNER PHILHARMONIE  
ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

1997年日本公演



9月

---

**27** 日〔土〕 17:00 名古屋 愛知県芸術劇場コンサートホール A 主催=中部日本放送/中日新聞社

---

**28** 日〔日〕 14:00 大阪 ザ・シンフォニーホール B 主催=朝日友の会/朝日放送

---

**29** 日〔月〕 18:45 福岡 福岡シンフォニーホール A 主催=グリーンコンサート福岡

---

10月

---

**1** 日〔水〕 18:15 松戸 聖徳学園川並記念講堂 A 主催=聖徳大学

---

**2** 日〔木〕 19:00 東京 サントリーホール C 主催=中部日本放送/コンサートイマジン

---

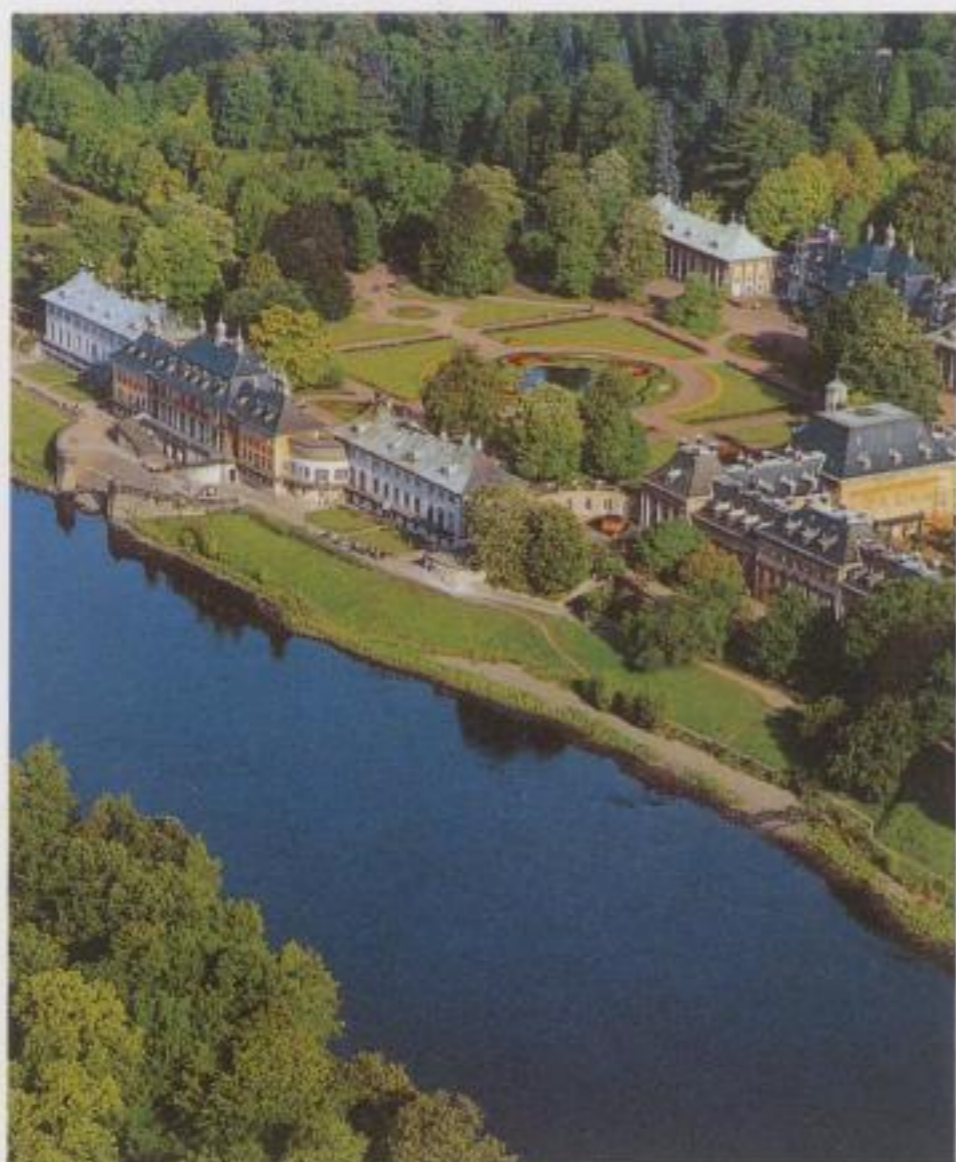
**3** 日〔金〕 19:00 東京 東京オペラシティ D 主催=中部日本放送/コンサートイマジン

---

招へい：中部日本放送  
協力：☺ Lufthansa



## Message



ドレスデンは、古くからエルベ河畔のフィレンツェと称され、風光明媚な環境とともに、文芸、絵画など数多くの芸術が花開いた古都として知られております。特に音楽では、ドレスデン国立歌劇場、十字架少年合唱団など古い歴史と高い芸術性を兼ね備えた世界的水準の演奏団体が肩を並べ、この文化都市の名声を高めてきました。ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団もこれらの一員として、永年に亘って世界中にその充実した演奏力を披露してまいりました。1994年からは、フランスきっての名指揮者ミッシェル・ブラソン氏を首席指揮者に迎え、伝統の響きにますます磨きをかけております。このたびCBCが、国際文化交流事業の一環として、この名オーケストラの9回目の来日公演を招聘できましたことは非常な喜びです。

第2次世界大戦下でのドレスデン陥落から、戦後、不死鳥のように甦ったこのオーケストラの美しい響きは、東西分裂を経てベルリンの壁崩壊で新たに生まれ変わったドイツの、平和への折りを象徴するものでもあります。本日の公演で心ゆくまで堪能して頂きたいと存じます。

中部日本放送  
代表取締役社長  
横山 健一





Die Dresdner Philharmonie, die in ihrer Heimatstadt jährlich rund 70 Konzerte gibt, ist seit ihrer Gründung im Jahre 1870 ein Orchester, das seine Kunst stets auch auf den Konzertpodien der Welt darbietet.

Seit 1975 bereist der in unmittelbarer Nähe des Dresdner Zwingers ansässige Klangkörper Japan und ist in diesem Jahr zum neunten Mal Gast in fünf Städten des "Landes der aufgehenden Sonne".

Die Konzerte stehen 1997 unter einem besonderen Zeichen: Zwei japanische Künstler gesellen sich als Solisten zu uns.

Wir freuen uns wie immer auf das musikbegeisterte Publikum Japans.

CBC sei herzlich gedankt für die professionelle und verlässliche Partnerschaft, wie wir sie seit vielen Jahren kennen.

*Dr. Olivier von Winterstein*

Dr. Olivier von Winterstein  
Intendant

Michel Plasson  
Chefdirigent

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は、本拠地で年間約70回の演奏会を開催しており、1870年に設立されて以来、数多くの海外公演で世界中にその芸術を披露しております。

有名なドレスデン宮殿中庭のすぐ近くに本拠を置くこの楽団は、日本にも1975年以降客演を重ねており、本年はこの「日の出ずる国」への9度目の訪問として5つの都市で公演いたします。

1997年のコンサート・ツアーは特別な内容を含んでいます。2人の日本人演奏家がソリストとして参加するのです。

われわれは、前回までと同様に、音楽に熱狂する日本の聴衆とお会いするのを楽しみにしております。

長年の協力関係でよく存じ上げている様な、プロフェッショナルで、信頼性のあるCBCのパートナーシップに心から感謝いたします。

オリヴィエール・フォン・ヴァンターシュタイン  
ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団  
総裁

ミッシェル・プラソン  
ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団  
首席指揮者





Photo : Frank Höhler

## ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

Dresdner Philharmonie

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は1870年に創立され、すでに120余年の歴史を持つオーケストラで、当初は演奏会場の名を冠した商工会議所管弦楽団と呼ばれていた。1871年のペテルスブルグ客演をはじめヨーロッパ各国、1909年のアメリカ客演など早くから国外公演を積極的に行ってきた。また「商工会議所管弦楽団」時代の1888年に、チャイコフスキーの指揮で彼の交響曲第4番を、89年にドヴォルザークの指揮で彼の交響曲第5番を演奏したほか、ブラームス、ハンス・フォン・ビューロー、R.シュトラウス、プゾーニ、ラフマニノフとも共演している。

第二次世界大戦のため、一時解散を余儀なくされたが戦後再編成、60年代後半までハインツ・ボンガルツ、ホルスト・フェスルターが技術向上に務め、その後、クルト・マズア、ギュンター・ヘルビヒが音楽監督に就任してから安定し、ヘルベルト・ケーゲル、イヨルグ=ペーター・ヴァイグレが伝統の響きを支えてきた。

そして94-95のシーズンから、これまで「第一客演指揮者」であったミッシェル・ブラソンを首席に迎えることとなった。

ドイツらしい味わいの中に、ドレスデン独特の柔らかい響きと、同じドレスデンのシュターツカペレとは異なる新鮮さと現代感覚を備えた演奏は多くのファンを魅了し、客演の指揮者ならびにソリストたちも、このオーケストラの持つ芸術性の高さを絶賛している。彼らの実力については前回1995年のCBCの招へい公演で実証された。





## 首席指揮者：ミッシェル・プラソン

Chief Conductor : Michel Plasson

1933年パリの音楽家の家庭に生まれる。パリ音楽院で、ラザール・レヴィにピアノ、ウージェーヌ・ピゴールに指揮法を師事し、1963年ブザンソン国際指揮者コンクールで最優秀賞を受賞。その後アメリカに渡り、ストコフスキー、バーンスタインやラインスドルフの指導を受ける。1965年に帰国し、東フランスのメス歌劇場の主任指揮者となり、1968年にはトゥールーズ市立歌劇場の常任指揮者となり、音楽総監督を経て1973年には芸術総監督となった。プラソンは同歌劇場のオーケストラ、トゥールーズ国立管弦楽団とのコンサート活動も積極的に行った。そして、フランス各地の名門オーケストラに客演する一方、1974年にはニューヨーク・シティ・オペラ、77年にはメトロポリタン歌劇場のデビューも果たしている。

また、トゥールーズ国立管弦楽団を率いて、有名主要作品や過去に知られていなかった優秀な作品をレコーディングし、フランスの遺産を守ることに力を尽くしている。その結果、プラソンとトゥールーズ国立管弦楽団に対し「年間オーケストラ指揮者」部門と「年間叙情芸術録音」部門の二つの「クラシック音楽英雄賞」が授与された。

1992年、芸術・文化賞を受勲。レジョン・ド・ヌール四等勲章を受勲。

1994年のシーズンから「ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団」の首席指揮者にも就任した。





## DIE DRESDNER PHILHARMONIE

Chefdirigent ; Generalmusikdirektor Michel Plasson  
Erster Gastdirigent ; Juri Temirkanow  
Ehrendirigent ; Prof. Kurt Masur

### 1. VIOLINEN

Ralf-Carsten Brömsel (KV)  
Heike Janicke  
Wolfgang Hentrich  
Gerhard-Peter Thielemann (KV)  
Siegfried Koegler (KV)  
Siegfried Rauschhardt (KV)  
Christoph Lindemann  
Günter Hensel (KV)  
Jürgen Nöllau (KM)  
Volker Karp (KV)  
Gerald Bayer (KV)  
Roland Eitrich (KM)  
Heide Schwarzbach (KM)  
Marcus Gottwald  
Ute Kelemen  
Antje Becker  
Johannes Groth  
Alexander Teichmann  
Annegret Dill  
Friederike Seyfert

### 2. VIOLINEN

Heiko Seifert (KM)  
Günther Naumann (KM)  
Klaus Fritzsche (KV)  
Herbert Fischer (KV)  
Egbert Steuer (KV)  
Erik Kornek (KV)  
Dietmar Marzin (KM)  
Reinhard Lohmann (KM)  
Viola Marzin (KM)  
Steffen Gaitzsch (KM)  
Dr. Matthias Bettin  
Andreas Hoene  
Andrea Dittrich  
Constanze Nau  
Matthias Groppe

### BRATSCHEN

Ulrich Eichenauer  
Andreas Kuhlmann  
Beate Müller  
Steffen Seifert (KM)  
Manfred Vogel (KV)  
Gernot Zeller (KV)  
Lothar Fiebiger (KM)  
Wolfgang Haubold (KM)  
Holger Naumann (KM)  
Steffen Neumann  
Andree Hofmeister  
Heiko Mürbe  
Hans-Burkart Henschke  
Andrea Mamat

### VIOLONCELLI

Matthias Bräutigam (KV)  
Ulf Prella  
Erhard Hoppe (KV)  
Petra Willmann  
Thomas Bätz (KM)  
Frieder Gerstenberg (KV)  
Wolfgang Bromberger (KM)  
Siegfried Wronna (KM)  
Freidhelm Rentzsch (KM)  
Rainer Promnitz  
Karl-Bernhard von Stumpff  
Clemens Krieger  
Daniel Thiele

### KONTRABÄSSE

Prof. Peter Krauß (KV)  
Kilian Forster  
Tobias Glöckler  
Berndt Fröhlich (KV)  
Roland Hoppe (KV)  
Norbert Schuster (KM)  
Bringfried Seifert  
Thilo Ermold  
Donatus Bergemann  
Matthias Bohrig

### FLÖTEN

Karin Hofmann  
Sabine Kittel  
Birgit Bromberger (KM)  
Götz Bammes (KM)  
Bernhard Kury



Intendant ; Dr. Olivier von Winterstein  
Chefdramaturg ; Klaus Burmeister  
Verwaltungsdirektor ; Wieland Lafferentz

#### OBOEN

Gerhard Hauptmann (KV)  
Guido Titze  
Prof. Wolfgang Bemann (KV)  
Jens Prasse  
Gerd Schneider (KV)

#### KLARINETTEN

Prof. Hans-Detlef Löchner (KV)  
Fabian Dirr  
Henry Philipp (KM)  
Dittmar Trebeljahr  
Klaus Jopp (KM)

#### FAGOTTE

Hans-Peter Steger (KV)  
Michael Lang (KV)  
Hans-Joachim Marx (KV)  
Günther Köthe (KV)  
Mario Hendel (KM)

#### HÖRNER

Volker Kaufmann (KV)  
Jörg Brückner  
Michael Schneider  
Peter Graf (KV)  
Klaus Koppe (KM)  
Johannes Max  
Dietrich Schlät  
Carsten Gießmann

#### TROMPETEN

Mathias Schmutzler (KM)  
Csaba Kelemen  
Wolfgang Gerloff (KV)  
Michael Schwarz (KV)  
Roland Rudolph (KM)

#### POSAUNEN

Joachim Franke (KM)  
Olaf Krumpfer  
Reinhard Kaphengst (KM)  
Dietmar Pester  
Frank van Nooy

#### TUBA

Martin Stephan (KV)

#### HARFE

Nora Koch

#### PAUKEN/SCHLAGZEUG

Alexander Peter  
Prof. Karl Jungnickel (KV)  
Gerald Becher (KM)  
Axel Ramlow (KM)

#### TASTENINSTRUMENTE

Ingeborg Friedrich

#### ORCHESTERVORSTAND

Volker Karp  
Klaus Koppe  
Prof. Hans-Detlef Löchner

#### ORCHESTERINSPEKTOR

Matthias Albert

#### ORCHESTERWARTE

Herybert Runge  
Bernd Gottlöber  
Helmut Friemel

KM=Kammermusiker

KV=Kammervirtuos





## 上野信一(ティンパニー)

Ueno Shinichi

3才よりマリンバとピアノによる音楽基礎教育を受ける。国立音楽大学を首席卒業。武岡賞受賞。渡仏、ストラスブル国立音楽院卒業。ジャン・パティーニュ、シルヴィオ・グアルダ各氏をはじめ、クリストフ・カスケル、ジャンピエール・デュルエ氏らにも師事。フランス国立音楽院連合コンクール最上級課程ブルミエ・プリ。バリ国際現代音楽コンクール打楽器部門特別賞。マリア・カナルス国際コンクール、ソロ打楽器部門・第3位。ストラスブル・フィルハーモニー管弦楽団打楽器奏者、本日の指揮者、ミッシェル・ブラソンのもとでフランス国立トゥールーズ・キャピトル管弦楽団首席打楽器、ティンパニ奏者を務めた。世界各地の国際フェスティバルに出演。現在、ソロ・パーカッションリストとして精力的に活動しており、欧米の作曲家が打楽器のために書いた作品の日本初演、邦人作曲家の世界初演を数多く手掛けて打楽器音楽の普及啓蒙に努める。

国立音楽大学、同付属高校、宇都宮音楽短期大学・非常勤講師。パーカッション・グループ“PHONIX-Réflexion”を主宰。

これまでにA.Jolivetの打楽器協奏曲、P.Crestonのマリンバ協奏曲を共演。96年4月には Niel. Dé Pontéのウインドオーケストラとマリンバのための協奏曲のオリジナル編成での日本初演を行った。今後も多くの作曲家の作品の初演や共演が既に予定されている。



## 井上圭子(パイプオルガン)

Keiko Inoue

東京芸術大学、同大学院で廣野嗣雄に師事。その後、ドイツ・フライブルク音楽大学に留学、ジグモント・サットマリーに師事。ソロ科を卒業、国家演奏家試験に合格、プロの演奏家として活動を開始。バッハを中心とするオルガン本来の作品ばかりでなく、オペラや映画音楽の編曲物にも積極的に取り組むなどオルガン音楽の普及にも力を注ぎ、その魅力を多くの人に伝えてきた。ソロはもとより、フランス国立リヨン管、ブラハ放響、N響、都響、エムパイヤブラスなど内外の有名オーケストラやアンサンブルとの共演も数多く、特に日本フィルとの「パイプオルガンとオーケストラの饗宴」や12月のクリスマスコンサートは毎回超満員の聴衆を集め大好評となっている。CDではデンオンより「バッハ・ファンタジー」「メンデルスゾーン・ファンタジー」など9枚が好評発売中。

井上圭子ホームページ

<http://www.bekkoame.or.jp/~toccata/>



# A

■ J.S. バッハ ■  
組曲 第3番 ニ長調

■ シューベルト ■  
交響曲 第7番 ロ短調「未完成」

■ ベートーヴェン ■  
交響曲 第6番 ヘ長調「田園」

# B

■ ブラームス ■  
交響曲 第4番 ホ短調

■ ベートーヴェン ■  
交響曲 第6番 ヘ長調「田園」

# C

■ シューベルト ■  
交響曲 第7番 ロ短調「未完成」

■ W. クラフト ■  
ティンパニーと管弦楽のための協奏曲  
ティンパニー=上野信一  
打楽器=大高達士/伊勢友一/荻原松実  
チューバ=大沢健一 ハープ=伊藤元子  
ピアノ・チェレスタ=内海源太

■ ベートーヴェン ■  
交響曲 第6番 ヘ長調「田園」

# D

■ ルーセル ■  
シンフォニエッタ

■ プーランク ■  
オルガン、弦楽とティンパニーのための協奏曲  
オルガン=井上圭子

■ ブラームス ■  
交響曲 第4番 ホ短調





シューベルト

## ●シューベルト 交響曲第7番 口短調 D. 759「未完成」

シューベルトが残したもっとも美しく、またロマンティックな情緒表現にあふれたこの名作は、作曲者25才の時、1822年の10月30日から着手されている。順調に第1楽章、第2楽章を完成させ、第3楽章冒頭の一部(20小節)までを作り上げるが、シューベルトはその後、この交響曲を放置してしまう。その理由は、彼の病気、創作上の行き詰まりなどさまざまなのが憶測されているが、明確な確証はなく謎となったままである。

そんな状況下の1823年4月、シューベルトはグラーツのシュタイアーマルク音楽協会の名誉会員に推薦されるという栄誉を授かっている。喜んだシューベルトは御礼の作品としてこの交響曲口短調の総譜を音楽協会の一員であったアンセルム・ヒュッテンブレンナーに送っている。ヒュッテンブレンナーはこの作品が未完成なのを見て、おそらく続く楽章が後に届けられると判断したのであろう、放置してしまった。そして5年後の1828年にはシューベルトは死去、この交響曲はいつしか忘れ去られてしまった。

この交響曲の存在が確認されたのはヒュッテンブレンナーの弟ヨーゼフが1860年に兄の蔵書を調査した時のことで、驚いたヨーゼフはすぐに指揮者ヨハン・ヘルベックにそのことを知らせている。しかし当時はこの発見が歴史的な大事件であるとは誰も思わなかったのであろう、初演は遅れて1865年12月17日ようやく行われている。シューベルトがきわめて充実した創作活動を繰り返していた時期の傑作であり、ほぼ同時期に「さすらい人幻想曲」D760、歌曲集「美しき水車小屋の娘」D795、劇音楽「ロザムンデ」の音楽D797などが生

まれている。

第1楽章 アレグロ・モデラート 3/4拍子  
口短調 ソナタ形式

第2楽章 アンダンテ・コン・モト 3/8拍子  
ホ長調 二部形式

## ●ウィリアム・クラフト ティンパニと管弦楽のための協奏曲

ウィリアム・クラフトは1923年シカゴに生まれたアメリカを代表する作曲家である。しかし初期のキャリアは打楽器奏者としての演奏活動に捧げられており、26年間にわたってロスアンジェルス・フィルハーモニー管弦楽団の一員として活躍している。またストラヴィンスキー自身が1961年に指揮して録音した「兵士の物語」に打楽器奏者として参加しているし、またクラフトが組織したロスアンジェルス・パーカッション・アンサンブルはブーレーズの「主のない槌」、シュトックハウゼンの「ツィクルス」など現代曲をアメリカ初演をしたことでも大きな業績を残している。

作曲活動は1960年代から活発に行っているが、本日演奏される「ティンパニと管弦楽のための協奏曲」はトーマス・エイキンス率いるパーカッション・プロジェクトとインディアナポリス交響楽団からの委嘱で作られたもので、1984年にジョン・ネルソンの指揮で初演されている。全体は3楽章により構成されており、作曲中に他界した母に捧げられた第2楽章には特別に「ティンパニのためのポエム」とのタイトルが添えられている。独奏ティンパニに対して、オーケストラは、2フルート(ピッコロ持ち替え)、2オーボエ(一人はイングリッシュホルン持ち替え)、2クラリネット、2ファゴット



ト、4ホルン、3トランペット、3トロンボーン、チューバ、3パーカッション、ハープ、ピアノ（チェレスタ）、そして弦合奏という大編成である。演奏時間はほぼ23分である。

### ●交響曲第6番 ヘ長調 作品68「田園」

闘争的な第5番とはまったく対照的な、牧歌的で平和な交響曲だが、作曲はほぼ並行して進められており、対照的な性格の作品を同時に生み出すというベートーヴェンならではの創作姿勢がここでも発揮されている。もっとも、本格的に力が入れたのは第5交響曲完成以後のことと推定され、1808年6月辺りからベートーヴェンお気に入りのウィーン郊外の田園地帯ハイリゲンシュタットで筆が進められた模様である。初演は1808年12月22日、ウィーンのアン・デア・ウィーン劇場で行われており、第5番と同じ日に初演されている。もっともその時はこのヘ長調の交響曲が第5番とされていた。また初演の際、「田園の生活の思い出」というタイトルが与えられていたが、後の出版譜には「田園交響曲」(シンフォニア・パストラレ)とのみ記されている。

小川のせせらぎ、小鳥の鳴き声、そして嵐の描写など美しい自然描写を特徴とするが、ベートーヴェン自身が語っているように「描写というよりも感情の表現」としての性格が強く、作曲者からの熱烈な、またロマンティックな自然賛歌と考えられる。なお全体は5楽章からなり、第3楽章以降は続けて演奏される。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロポ ヘ長調 2/4拍子 ソナタ形式「田園に到着した時の愉快的気分」

第2楽章 アンダンテ・モルト・モツ 変ロ長調 12/8

拍子 ソナタ形式「小川のほとりの情景」

第3楽章 アレグロ ヘ長調 3/4拍子 三部形式「農民の楽しい集い」

第4楽章 アレグロ ヘ短調 4/4拍子 二部形式「雷雨、嵐」

第5楽章 アレグレット ヘ長調 6/8拍子 ソナタ形式「牧人の歌、嵐の後の喜びと感謝の気持ち」

### ●ルーセル

#### シンフォニエッタ 作品52

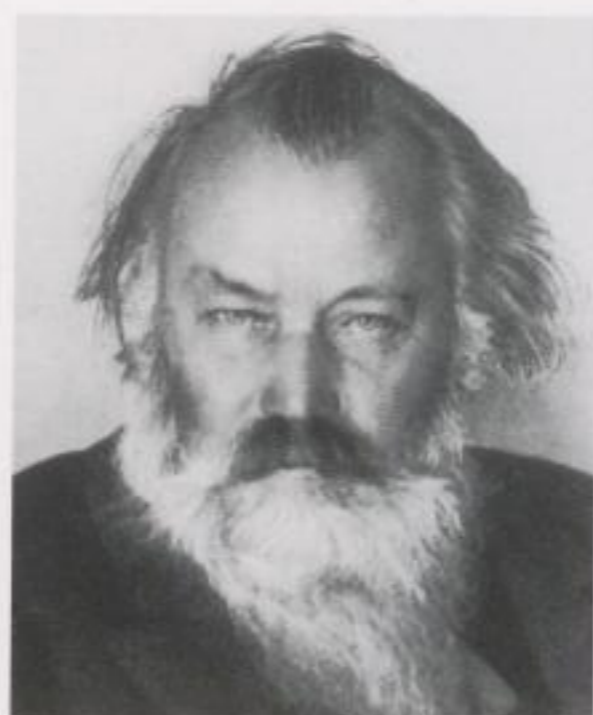
今年が没後60年となるアルヴェール・ルーセル（1869～1937）は、一時期、海軍に身をおいていたこともあり、作曲活動は今世紀の声を聞いてから行われるなど、遅咲きの作曲家であった。スコラ・カントルムにおいて対位法の教授を務め、サティやヴァレーズの師となるなど教育者としての業績も残しているが、生涯にわたってグループや徒党を組むことはなく、ただ黙々と創作活動に励んできた音楽家である。しかし、その作風は若々しい活力をみなぎらせた躍動感あふれるもので、その成果は4つの交響曲、そしてバレエ音楽「パッカスとアリアース」などに結晶となっている。ここに聴く「シンフォニエッタ」は1934年に書かれた晩年の作であるが、ルーセルらしい輝くような力作である。

ルーセルは先立つ1930年クーセヴィツキーからの委嘱で交響曲第3番を作曲、現代を代表するシンフォニストであることを強く印象づけているが、その後重い肺炎を煩い、生死の間をさまよう経験をしている。その回復を待ってフランスの女性指揮者ジャヌ・エヴラール（名指揮者ガストン・ブーレ夫人でもあった）からの委嘱を受けて作られたのが、この





プーランク



ブラームス

「シンフォニエッタ」である。作品はエヴラールが組織していたバリの女性管弦楽団により1934年11月19日、サル・カヴォで初演されている。全体は下記の3つの楽章で構成されており、弦楽合奏により演奏される。

第1楽章 アレグロ・モルト 3/4拍子

第2楽章 アンダンテ 3/4拍子

第3楽章 アレグロ 3/4拍子

### ●プーランク オルガン、弦楽とティンパニのための協奏曲 ト短調

1899年パリに生まれ、1963年同地に没したフランシス・プーランクは、何よりも明るく分かりやすい音楽を書き続けた今世紀フランスを代表する作曲家である。しかし、あまりにも平明で複雑さに欠ける書法は、高度な技術と深い感受性に不足する作曲家と誤解させる原因ともなり、その真価が正しく理解されるようになったのは、第二次大戦以後のことであったといつてよいであろう。

プーランクは得意としたピアノ曲を中心に、歌曲、オペラ、室内楽曲、宗教作品など、実に多彩な創作活動を繰り広げているが、技巧的関心と華やかな表現効果とが盛り込める協奏曲には大いに関心をそそられている。プーランクが残した協奏曲は、クラヴサンとオーケストラのための「田園のコンセール」(1928)、二つのピアノのための協奏曲(1932)、ピアノ協奏曲(1949)などの名作があるが、おそらくこの「オルガン、弦楽とティンパニのための協奏曲」こそがもっとも広く知られているものであろう。作曲は1936年から38年にかけて行われているが、この時期はプーランクが親しい友人で作曲

家であったピエール・オクターヴ・フェルーを事故で失い、一段と深くカトリック信仰に目覚めるようになるなど、創作活動の転機にあたる頃でもあった。そんな時期に作られた訳だが、プーランクはこの協奏曲を「私の宗教曲とならぶ大切な作品である」と記しているし、オルガンを独奏楽器の一つとした理由について、教会での演奏の可能性も考慮したからであると述べており、当時の心境が反映された作品であることをうかがわせている。

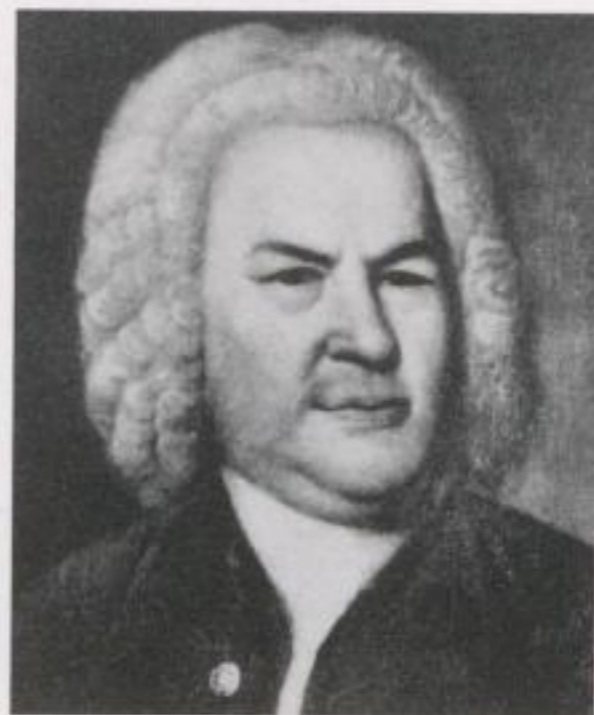
初演は1939年6月21日、モーリス・デュリュフレのオルガン、デゾミエール指揮バリ交響楽団により行われている。

曲は下記の7つの部分により構成されているが、切れ目なく連続して演奏される。「アンダンテ」～「アレグロ・ジョコーソ」～「アンダンテ・モデラート」～「テンポ・アレグロ・モルト・アジタート」～「とても穏やかに、レント」～「最初のアレグロのテンポで」～「導入部のテンポで、ラルゴ」

### ●ブラームス 交響曲第4番 ホ短調 作品98

ブラームス最後の交響曲第4番は、第3交響曲完成の翌年1884年6月から作曲が始められており、作曲者51才から翌年にかけての作である。ブラームスは、かつて父とともに旅行を楽しんだこともある思い出の地、ウィーン西南シュティリア地方の避暑地ミュルツツーシュラクに別荘を借り、創作に専念、同年夏には、第1楽章と第2楽章を書き上げ、友人のエリーザベト・ヘルツォーゲンベルク夫人に郵送している。そして翌年の夏には第3、第4楽章を作曲するなど、創作の筆は順調に進んだようである。なお作曲中、隣家で火事が





J.S. バッハ

あり、その勢いはブラームス宅まで及ぶほどだったが、ブラームスは机に草稿を残したまま消火活動に協力、楽譜は友人が煙の中からかろうじて持ち出したというエピソードも伝えられている。

既に当代随一の作曲家として名声も高かったブラームスではあるが、意外にもこの新しい交響曲がどのように受け入れられるか心配でならなかった。ことに変奏曲による終楽章が不安で、エリーザベトにも「最後まであなたが聴き続けてくれるのか心配だ」ともらしたほどである。さらに初演には万全のリハーサルを必要とすると判断したブラームスは、友人ハンス・フォン・ビューローが指揮者を務めていたマイニンゲンの宮廷管弦楽団での初演を希望しているし、事実、予定よりも早めにマイニンゲン入りしてビューローとともに緻密なりハーサルを重ねている。初演は1885年10月25日、マイニンゲンにおいてブラームス自身の指揮により行われ、11月1日にはビューローの指揮でも演奏、いずれも大きな成功を収めている。

この交響曲は、重厚壮大であると同時に厳しい内面性をもっており、孤独、寂しさ、あるいは諦めにも似た感情表現が盛り込まれている。ブラームスはこの交響曲完成の後、さらに12年の歳月を生きているから、これが最晩年の作品という訳ではないが、作品はなぜか回顧的であり、人生の秋を思わせる風情をたたえている。また、バロック音楽やそれ以前の音楽に負った特徴もあり、第2楽章の主題には古い教会旋法のひとつフリギア旋法が用いられているし、終楽章はバロック時代の変奏曲の形式パッサカリアで書かれている。しかもその主題はバッハのカンタータ第150番「主よ、我汝を仰ぎ望む」の主題が採用されるなどバッハへの接近も見せている。

- 第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ ホ短調 2/2拍子
- 第2楽章 アンダンテ・モデラート ホ長調 6/8拍子
- 第3楽章 アレグロ・ジョコーソ ハ長調 2/4拍子
- 第4楽章 アレグロ・エネルジーコ・エ・パッショナータ ホ短調 3/4拍子

### ●J.S. バッハ

#### 管弦楽組曲第3番 二長調 BWV1068

バッハがおそらくライプツィヒ時代(1723~50)に作曲したと推定されている4つの管弦楽組曲は、あふれるばかりの創作意欲と聴き手を楽しませる遊び心が美しい結晶となった名曲ばかりである。それらはバッハが指導をしていたコレギウム・ムジクムとよばれるオーケストラにより演奏され、当時から大きな人気を博していたと伝えられている。この演奏会はゴットフリート・ツィンマーマンが所有していたコーヒー・ハウスで行われていたもので、夏は庭園での演奏が人気を博し、ライプツィヒ市民の憩いとも楽しみともなっていたようである。バッハは、これらの組曲を緩~急~緩の構造をもつフランス風の序曲で開始し、続いて舞曲の様式による複数の楽章を配置しているが、全4曲はいずれも個性的であり、多彩な魅力を競い合うかのようである。

第3番は、トランペットとティンパニを伴う壮麗で、しかも祝典的な雰囲気をもつ大作である。輝かしい序曲に続いて、エア(アリア)、一対のガヴォット、ブーレそしてジークが続く構成である。なおエアは19世紀にドイツのヴァイオリン奏者が「G線上のアリア」として編曲、世界的に親しまれるようになっていく。



# ミッシェル・プラソンとドレスデン・フィルについて

■浅里公三

ミッシェル・プラソンは現在のフランスを代表する名指揮者である。1933年にパリの音楽一家に生まれたプラソンは、パリ音楽院で指揮とピアノをウジェーヌ・ピゴールとラザール・レヴィに師事したほか、打楽器も学び、卒業後はしばらくパリ音楽院管弦楽団の打楽器奏者をつとめたという。そして、1963年のプザンソン国際指揮者コンクールに優勝後、プラソンはシャルル・ミュンシュのすすめでアメリカに渡り、ミュンシュのほかパーンスタイン、ストコフスキー、ラインスドルフなどの個性豊かな指揮者たちにも学び、1965年に帰国すると、まずフランス東部のメス歌劇場の音楽監督として活躍、1968年にはトゥールーズ・カピートル劇場の音楽監督に任命されたのである。

プラソンが指揮者としてデビューした1960年代の中頃から後半にかけてのフランスの音楽界は、大きな変革期を迎えていた。ピエール・モントゥー、デジレ＝エミール・アンゲルブレシュト、プラソンの師ピゴール、そしてアンドレ・クリュイタンスなど、今世紀前半のフランスを代表する名指揮者たちを相次いで失い、フランス政府は文化相アンドレ・マルローを中心に音楽界の機構改革をはじめた時期でもあった。マルローはまず、すぐれた歴史と伝統を誇るパリ音楽院管弦楽団を解体し、新しくパリ管弦楽団を創設し、初代の音楽監督にミュンシュを迎え、また、地方のオーケストラと歌劇場を充実させるために各主要都市の組織を国立にした。

そのためプラソンが音楽監督に就任したフランス南部の古都トゥールーズのカピートル劇場と管弦楽団の所管も、市から県、国へと変わった。しかし、発足して間もなくミュンシュを失ったパリ管弦楽団が、その後、カラヤンとショルティを音楽顧問に招き、さらにバレンボイム、現在のビシュコフと外国から音楽監督を招いているのとは対照的に、1973年に



総監督となったプラソンは現在まで約30年間、トゥールーズを中心にオペラとコンサートの双方で活躍。水準を急速に高め、そのすぐれた手腕を高く評価されている。

プラソンは1970年代から世界各地の歌劇場とオーケストラに客演して国際的にも知られるようになったが、とくに彼が率いるトゥールーズ・カピートル管弦楽団とEMIとDGに録音したベルリオーズから現代にいたるフランス音楽により、第一人者としての名声を決定づけたといえるだろう。実際、プラソンがこれまでに録音した19世紀以後のフランス音楽は、管弦楽作品、オペラ、オペレッタなど、さまざまなジャンルに及んでいて、いずれも非常にすぐれた演奏だった。そのためにプラソンがフランス音楽のスペシャリストのように思われているのもやむをえないのかもしれない。

だから、プラソンが1994年にドイツのすぐれた伝統を誇るオーケストラのひとつであるドレスデン・フィルハーモニーの首席指揮者に就任したというニュースに驚いたひとも多いと思うが、プラソンはフランス音楽はもとよりドイツ、イタリア、ロシアなどのオーケストラ作品とオペラにもすぐれた





Photo: Frank Höhler

演奏を聴かせる指揮者である。

トゥールーズの総監督としてのブラソンは、フランスの作品だけでなく、当然、モーツァルト、ワーグナー、ヴェルディ、ムソルグスキーなどのオペラ、あるいはハイドン、ベートーヴェン、チャイコフスキーなどの交響曲も指揮しているのである。

ただ、ブラソンの録音がこれまではフランス音楽に集中していたためフランス音楽のスペシャリストというイメージが一般的にあるのもやむをえない。しかし、過去のモントゥー、ミュンシュ、クリュイタンスなどのフランスの巨匠たちも、ベートーヴェンやブラームス、あるいはワーグナーなどを主要なレパートリーにしていた。「春の祭典」を初演したモントゥーは、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、R. シュトラウスなどの作品にも定評があったし、ミュンシュがバリ管弦楽団と録音したブラームスの交響曲第1番は今なお最高の演奏のひとつに数えられている。またベルリン・フィルとはじめてベートーヴェンの交響曲全集を録音したのは、クリュイタンスだった。クリュイタンスの録音は、ベルリン・フィルの音楽監督がフルトヴェングラーからカラヤンに交代した1950年代の後半に行われたが、当時、クリュイタンスは毎シーズン定期的に客演してベートーヴェンのシリーズを指揮し、それが好評だったために録音されたといわれている。

ブラソンもドレスデン・フィルハーモニーの首席指揮者に就任する以前から首席客演指揮者として毎シーズン客演していたので、その実績を評価して首席指揮者に迎えられたのだろう。この数年、ブラソンはレコーディングにおいてもトゥールーズでオルフの「カルミナ・ブラーナ」やヴェルディの「レクイエム」を録音、またドレスデン・フィルハーモニーともワーグナーの「ジークフリート牧歌」と「ファウスト」

序曲のほか、滅多に録音されたことのない合唱曲を含む「ワーグナー秘曲集」を録音するなど、彼のこれまで知られざる才能の一端を次第に明らかにしつつある。

そしてまた、ブラソンは1995年のドレスデン・フィルハーモニーとの日本公演において、ハイドンの交響曲第49番「受難」とブルックナーの交響曲第4番「ロマンティック」、ベートーヴェンの交響曲第7番とブラームスの交響曲第2番、プーランクの協奏曲とサン＝サーンスの交響曲第3番という3つのプログラムにそれぞれすぐれた演奏を聴かせてくれたことを記憶しているファンも多いと思う。

前回、ほくはベートーヴェンとブラームスの交響曲のプログラムしか聴けなかったけれど、自分の個性よりも音楽の本質を聴衆に伝えようとするブラソンの誠実な姿勢が感じられ、またベートーヴェンとブラームスの交響曲の特徴と魅力も明確に表現した、とても後味のよい演奏だった。それは音楽よりも自分を目立たせようとする指揮者も少なくない昨今、ブラソンとドレスデン・フィルの演奏には、表面的な華やかさよりも作品の本質に迫ろうとする真摯さが感じられただけでなく、何よりもベートーヴェンとブラームスのすばらしい音楽を十分に味わうことができたからでもある。

2年後の今回の来日でも、ブラソンはシューベルトの「未完成」、クラフトのティンパニ協奏曲、ベートーヴェンの「田園」、もう1回はルーセルの「シンフォニエッタ」、プーランクのオルガン、弦とティンパニの協奏曲、ブラームスの交響曲第4番という2つの非常に興味をそそるプログラムを組んでいる。「よい演奏をするには十分な時間と共通の目的意識をもった楽員との共同作業が必要」というブラソンだけに、今回はドレスデン・フィルハーモニーとさらに一段と磨きのかかった味わい深い音楽を聴かせてくれることだろう。



# 実り豊かなブラソンのレコーディング

■諸石幸生

1968年、35才の若さでトゥールーズ市立歌劇場の常任指揮者に就任、同時にキャピトル管弦楽団との演奏活動も始めたブラソンは、オペラ公演、オーケストラ・コンサートの両サイドでたちまち高い人気を獲得するが、レコーディングに対しても常に積極的に取り組んでいる。しかもそれらが常に人々の話題となり、また国際的レコード賞にも輝くなど、ブラソンは名盤作りのマエストロという点でも才能豊かである。

ブラソンの最初のレコーディングは1976年に行われたフランスのEMI（正確にはパテ・マルコニ）への録音ではなかったかと思われる。ショーソンの交響曲変ロ長調と、これが世界初録音となったショーソンの珍しい交響詩「祭の夕べ」を録音してレコード界にデビューしているが、それはACC、ADFの両ディスク大賞に輝き、一躍ブラソンとトゥールーズ市立管弦楽団の名を知らしめたのだった。同じ1976年にはオフエンバックの喜歌劇「ジェロルスティン大公妃殿下」というこれもまた録音される機会の少ないオペラを収録しているが（CBS）、ここではさらに粋で、しかも通俗性をも併せ持つ演奏を披露、ブラソンは新しい指揮者ならではの現代性と明るいセンスで新世代の名指揮者であることを広く音楽ファンに認めさせたのである。

しかしブラソンの洗練された音楽性が一般的な意味で広く認められ、高く称賛されたのはフォーレの管弦楽曲全集が登場した時であったといっていよう。これは1979年から81年にかけてのほぼ3年を費やした大仕事であったが、フランスの心、香り、気品をたたえた美しい演奏ばかりであり、誰もが改めてフォーレの世界の美しさに心あられるような感動を覚えたものである。それはこの全集が今なおカタログから消えることなく、フォーレのオーケストラ曲の模範的演奏

として聴き継がれている事実からも容易に確認されよう（EMI）。

この全集によりすっかりフォーレのスペシャリスト的イメージを獲得したブラソンは1984年にはこれまたフォーレの名作「レクイエム」を収録、さらに奥深い感動へと聴き手を誘うが、とりあえずこれで一連のフォーレ・シリーズを完結させたようだ。そして1985年からはレパートリーを拡大、一段と幅広い形で彼らの魅力をアピールしていく。

まず取り上げるべきは1985年に録音されたビゼーの劇音楽「アルルの女」である。通常は二つの組曲版しか演奏されない作品だが、ブラソンはその全曲を収録、この名作の全容に光りをあててファンの新たな関心と呼んだ。さらにブラソンは、1987年にはシャブリエの「管弦楽曲集」を録音する。「楽しい行進曲」や狂詩曲「スペイン」ばかりが録音されてきたシャブリエではあるが、ブラソンは「田園組曲」「いやいやながらの王様」など珍しい作品も収録、ここでもこの作曲家のオーケストラ曲の全容にファンの関心を集めさせたし、ラヴェルのオーケストレーションによるシャブリエのピアノ曲も録音するなど、緻密な研究成果も見せている。しかもブラソンの指揮で聴くこれらの物珍しい作品は、これまで録音されなかったことが不思議なくらい魅力的であり、埋もれた作品も指揮者の努力と情熱次第で宝石になることを実感させたものである。

翌1988年にはサディの管弦楽曲集も録音するが、この頃になるとブラソン＝トゥールーズはフランスが誇るもっともフランス的な味わいを堪能させる名コンビとしてその名をファンの間に定着させるようになっていく。その素晴らしさはパリの著名なオーケストラが国際色の名のもとにフランスの粋とセンスと遊び心を失ないつつあることへの美しき警鐘にも





似た意味をもつなど、なかなかオーケストラ界を刺激し続けている。

こうして管弦楽曲を中心に不動の名声を確立してきたブラソンは、1980年代後半からはフランス・オペラの録音にも力を入れるようになる。ビゼーの「真珠採り」を1989年に、グノーの「ファウスト」を1991年に、マスネの「ドン・キホーテ」を1992年に録音、トゥールーズ・オペラの真価を披露しているし、このほかにもルーセルの「バドマーヴァティ」、オッフェンバックの「美しきエレーヌ」、グノーのオラトリオ「死と生」などの録音にも着手して、ここでも録音される機会の少なかった作品に光りをあて、その真価を最良の演奏で披露するという情熱的仕事ぶりを見せている。

ブラソンの録音活動は従来、フランスのEMIに行われてきているが、1991年からはドイツ・グラモフォンへのレコーディングも始められる。ダリウス・ミヨーの交響曲から第1、2、6、7番を録音、またまた新機軸を打ち出した。作品そのものが珍しいものだし、それがドイツ＝オーストリア系作品に集中していたドイツ・グラモフォンに録音されたのだから、大きな話題となったが、演奏内容も傑出しており、太陽と光のディヴェルティメントというにふさわしい演奏で交響曲に対するイメージすら一変させたのだった。

さて、ブラソンは1992年に初めてドレスデン・フィルハーモニーの指揮台に立ち、南アメリカへの演奏旅行を成功させるが、これが縁で2年後にはこのドイツの名門オーケストラの首席指揮者に迎えらる。よほどの良縁であったのであろう、ブラソンはこの1992年にはこのオーケストラと最初の録音を始めている。ボロディンの2つの交響曲を旧東ドイツのレコード・レーベル、ベルリン・クラシックスに録音してい

るが、民族色を大切にしながらもいわゆる土臭さを取り除き、作品にこめられた詩情と生命力をくっきりと浮かび上がらせた演奏がなんとも爽快であったし、ドレスデン・フィルが前任者のケーゲルやヴァイグレの時代とは一変、きびきびとした躍動感と明るい音色とでブラソンの指揮に反応しているのが、実に新鮮で、また快い印象を与えてくれたものである (Berlin Classics1092)。

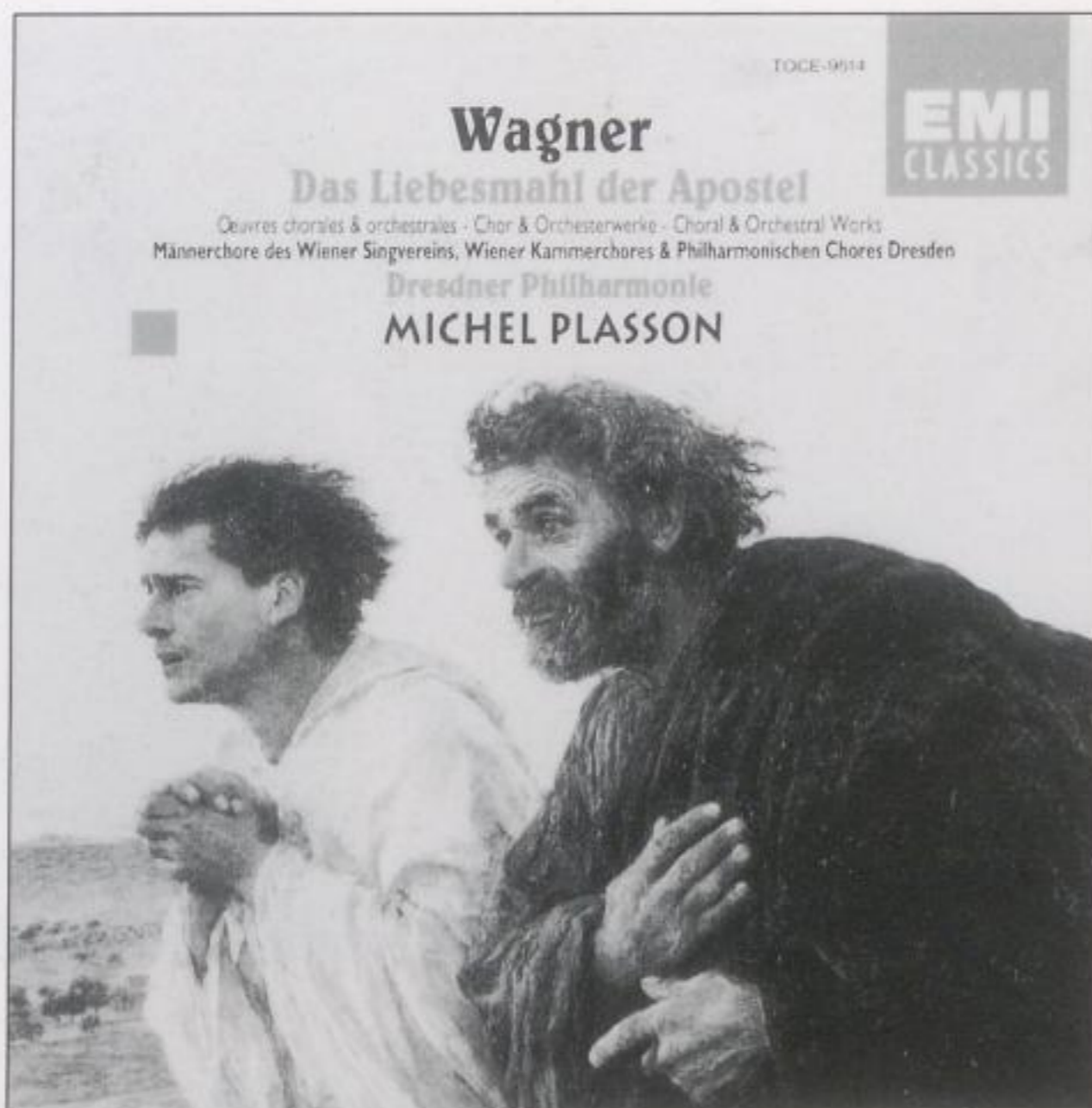
このドレスデン・フィルとの録音はその後にも継続されており、リストの管弦楽曲へと進展、「前奏曲」「タッソー」「マゼッパ」(同1093)、「プロメテウス」「祭典の響き」「山上で聞しきこと」(山岳交響曲) (同1126) といった名盤が生まれている。

ドレスデン・フィルと作り上げたもっとも新しいCDは、「使徒の愛餐」「ファウスト」序曲といった珍しい作品を集めた「ワーグナー秘曲集」だが、これは大作曲家の知られざる一面をクローズアップして好事家をうならせている (東芝EMI TOCE9514)。またトゥールーズのオーケストラとはサン＝サーンスの傑作、交響曲第3番を録音、フランス人指揮者としての心意気をアピールしていることも申し添えておきたい (同 TOCE9500)。

ブラソンのレコーディング・キャリアはこれまでのところはトゥールーズを中心に繰り広げられてきたが、今後、フランスもの以外はドレスデン・フィルと録音されていくことであろうから、これからの展開がますます楽しみである。



大作曲家ワーグナーの知られざる側面をえぐるプラッソンの異色作!



## 使徒の愛餐(ワーグナー秘曲集)

CD: TOCE-9514 定価2,854円(本体2,718円) デジタル録音:1996年5月 歌詞対訳付

ワーグナー:「ファウスト」序曲/祝祭歌:「その日が訪れた」(男声合唱と金管楽器のための)/ウェーバーの墓前で:「歌声をあげよ」(無伴奏男声合唱のための)/  
ジークフリート牧歌/葬送交響曲(ウェーバーの「オリアンテ」の動機による吹奏楽器のための)/使徒の愛餐(男声合唱と大オーケストラのための聖書の情景)

●ウィーン楽友協会(男声)合唱団 ●ウィーン室内(男声)合唱団 ●ドレスデン・フィルハーモニー合唱団 ●ドレスデン青少年合唱団 ●ミシェル・プラッソン指揮 ●ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

## プラッソン&ドレスデン・フィル

絶賛発売中

好評発売中



フランス音楽の最高の再現者プラッソンにより我が国で初めて紹介されるサン=サーンスの秘曲。

### 糸杉と月桂樹 (サン=サーンス秘曲集)

CD: TOCE-9464 定価1,733円(本体1,650円)  
デジタル録音:1995年7月

サン=サーンス

- 糸杉と月桂樹(オルガンと管弦楽のための) 作品156
- 誓い(3つの交響的場面) 作品130
- ブリューのドラマによる—
- マティアス・エザンペール(オルガン)
- ミシェル・プラッソン指揮
- トゥールーズ・カピートル国立管弦楽団



フランス音楽の美質を伝える数少ない指揮者プラッソンの最高のサン=サーンス!

### サン=サーンス 交響曲第3番「オルガン付き」

CD: TOCE-9500 定価1,733円(本体1,650円)  
デジタル録音:1995年7月

サン=サーンス

- 交響曲第3番・短調 作品78「オルガン付き」
- マティアス・エザンペール(オルガン)
- ミシェル・プラッソン指揮
- トゥールーズ・カピートル国立管弦楽団



現在カタログにない三曲の秘曲を含む名匠プラッソンが贈るファン待望のフランス交響詩集。

### 魔法使いの弟子 (フランス名交響詩集)

CD: TOCE-9159 定価2,854円(本体2,718円)  
デジタル録音:1994年11月、1995年6月

- デュカス: 交響詩「魔法使いの弟子」
- フランク: 交響詩「呪われた狩人」
- ラッザリー: 交響詩「夜の印象」
- デュバルク: 交響詩「レノール」
- サン=サーンス: 交響詩「死の舞踏」\*
- デュバルク: 交響詩「星たちに」
- マルコム・スチュワート(ヴァイオリン)\*
- ミシェル・プラッソン指揮
- トゥールーズ・カピートル国立管弦楽団

11月発売予定

フランスの巨匠、プラッソンのみが成し得る壮麗なヴェルディの合唱の世界。

### ヴェルディ:レクイエム

CD: TOCE-9547~8(2枚組)  
定価2,854円(本体2,718円)  
デジタル録音:1996年7月

- ユリア・ヴァラチ(ソプラノ)
- フェリシテ・ハーマー(メゾソプラノ)
- キース・オルセン(テノール)
- ロベルト・スカンディウツツイ(バス)
- ホルフェオン・ドノスタイアール合唱団
- ミシェル・プラッソン指揮
- トゥールーズ・カピートル国立管弦楽団

TOSHIBA EMI  
EMI CLASSICS



陶醉の音楽に驚愕の舞台!!  
エンターテインメント性溢れる大規模な装置で  
名ソリスト陣が繰り広げるオペラを超えたオペラ

# ベルリン・コーミッシェ・オーパー

## KOMISCHE OPER BERLIN



世界オペラ界をリードする巨匠ハリー・クップファー演出2作品



歌劇「ホフマン物語」(全5幕)  
作曲:J.オッフェンバック



喜歌劇「こうもり」(全3幕) ヨッヘン コフルスキー 参加  
作曲:J.シュトラウス

### 1998年 日本公演 日程

6月21日(日)	歌劇「ホフマン物語」	名古屋	愛知県芸術劇場(名古屋国際音楽祭参加)
24日(水)	喜歌劇「こうもり」	名古屋	愛知県芸術劇場(名古屋国際音楽祭参加)
27日(土)	歌劇「ホフマン物語」	東京	Bunkamura オーチャードホール
28日(日)	歌劇「ホフマン物語」	東京	Bunkamura オーチャードホール
29日(月)	歌劇「ホフマン物語」	東京	Bunkamura オーチャードホール
7月 3日(金)	喜歌劇「こうもり」	東京	Bunkamura オーチャードホール
4日(土)	喜歌劇「こうもり」	東京	Bunkamura オーチャードホール
5日(日)	喜歌劇「こうもり」	東京	Bunkamura オーチャードホール

12月初旬発売

招聘=中部日本放送

**CBC**

お問い合わせ 中部日本放送事業部

052-241-8118

ダイレクトメールによる案内をご希望の方は  
左記へご連絡下さい。

(財)日本オペラ振興会チケットセンター

03-5466-3181



# オーロラ鑑賞と「氷のホテル」・ドゥンドレット6・7・8日間

太陽光線と空気と磁気力によって発生する「自然の神秘・オーロラ」。

スウェーデン北部の北極圏にあるドゥンドレットは北緯67度で、オーロラベルトの真下に位置します。近くのキルナには「王立オーロラ研究所」があり、世界で最もオーロラの観測に適した地のひとつです。人工光が少なく、宿泊の敷地内よりオーロラが見られることもアラスカとは違う大きな特徴です。スキー、スノーボードはいうに及ばず、オプションツアーで「犬ぞり」や「トナカイゾリ」など素晴らしい体験をすることもできます。北極圏ですから、気温は大変低いのですが、湿気が少ないため以外と寒さを感じません。また、ユッカスヤルビにある「氷のホテル」では、文字どおり氷でできたホテルのベッドに宿泊していただけます。寒さが心配な方には、いざという時のためにコテージを別にお手配しておくことも可能です。

「Ice Bar」や「氷のサウナ」「ビデオシアター」など不思議ですてきな設備もご利用いただけます。その他、北欧のパリといわれる「トロムソ」と沿岸急行船クルーズで世界最大のソグネフィヨルドとオーロラを組み合わせたコースもございます。

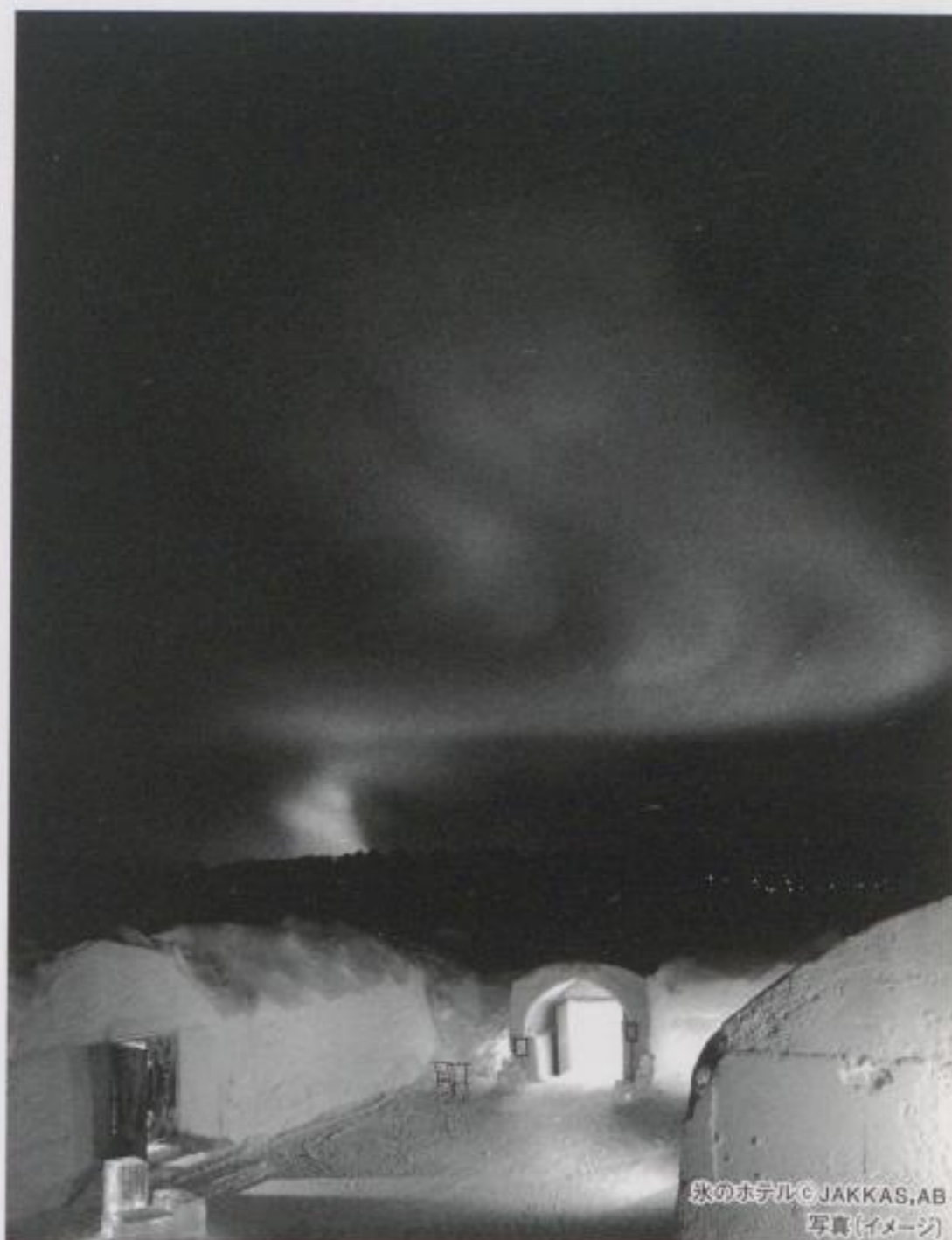
雄大な自然の中で、ふつうでない体験と旅行をしてみたいとお考えの方、まずは電話にてお問合せのうえ、パンフレットをご請求下さい。

日程：ご出発期間 12/21~3/31の設定日

(氷のホテルを含まないコースは10/1~4/15の設定日)

日次	訪問都市	交通	時間	時刻/行動予定	食事条件
1 1 1	東京発 コペンハーゲン着 コペンハーゲン発 ストックホルム着 ストックホルム発 キルナ着	SK984 Sk420 SK038	12:45 16:30 17:20 18:30 20:20 22:45	●スカンジナビア航空にてキルナへ。 (コペンハーゲン、ストックホルム乗り継ぎとなります。) ●スカンジナビア航空自慢の機内食(昼食、夕食)を ご賞味下さい。 ●着後、専用車(旅行代金に含まれます)にてドゥンドレットへ。 ●約100分のドライブ後、ホテル着	ドゥンドレット泊 <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>
2 2 3 3 4 4 5 5	ドゥンドレット滞在			●終日フリータイム (朝食はレストランでお召上がり下さい。) OP 犬ゾリサファリなどのオプションツアーをご利用下さい	ドゥンドレット泊 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
4 5 6	ドゥンドレット発 ユッカスヤルビ着			●午前11:00頃、専用車(旅行代金に含まれます)にて ホテル発、ユッカスヤルビの氷のホテルへ。約90分の ドライブです。 ●氷で造られたホテルのベッドで宿泊体験をお楽しみ下さい。	ユッカスヤルビ泊 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
5 6 7	キルナ発 ストックホルム着 ストックホルム発 コペンハーゲン着 コペンハーゲン発	SK025 Sk413 SK983	06:05 08:30 12:30 13:40 15:40	●BOXタイプの朝食をご用意致します。 早朝5:10頃、専用車(旅行代金に含まれます)にてキルナ 空港へ。約15分のドライブ後、空港着。各自でチェックイン。 ●キルナ発、スカンジナビア航空にて帰国の途へ。 (ストックホルム、コペンハーゲン乗り継ぎとなります。)	機中泊 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>
6 7 8	東京着		10:30		<input checked="" type="checkbox"/>

利用航空会社 : スカンジナビア航空(エコノミークラス)  
 宿泊予定ホテル : (ドゥンドレット)ドゥンドレットリゾートコテージ(シャワーのみ)  
 又はネックス、(ユッカスヤルビ)氷のホテル(相部屋・お部屋  
 にトイレ・シャワーはありません)  
 食事条件 : 6日間朝食4回、7日間朝食5回、8日間朝食6回  
 ご旅行代金 : 167,000円(6日間)~302,000円(8日間)2名1部屋利用  
 最少催行人員 : 2名  
 添乗員 : 同行しません。現地係員がお世話します。  
 ユッカスヤルビには係員はおりません



氷のホテル © JAKKAS, AB  
 写真(イメージ)

旅行主催: 運輸大臣登録旅行業第75号

株式会社 ジャパン アメニティ ラベル

〒104 東京都中央区銀座5-13-12 サンビル1F

☎ 03-3542-9946

カメラツアー

FAX: 03-3542-9554

1階カウンターへのご来店もお待ちしております。  
 (営業時間: 月~金、09:30~19:00、土・日・祝日休業)

旅行業務取扱主任者: 鴨下 純子



# 人生重いですか？

マア…いろいろありませアね。  
大人つてエのは…

アツシ等だつてそうですヨ。

オモイ荷物背負つて

砂漠に旅立つ朝は

そりやあ

命かけますヨ。

でもネ…

この背中に

東西の文化の交流つてんですか

“人類の発展”背負つてんだと

思えば、多少は責任も

感じますヨ。

なんせ、物流の根幹つて

アツシ等ですもんネ。

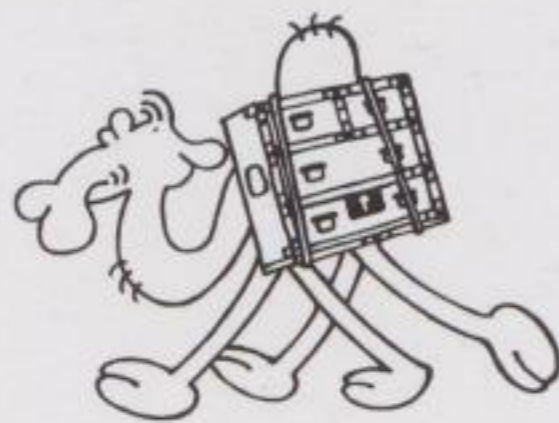
だから今日もプライドもつて

安全に徹して

文化の交流つてヤツに

出発します。

オタクも暗くなくなつてないで  
元気出してガンバつてヨ。



ジャパンエクスプレス運輸(株)  
東京:03-3472-6265 横浜:045-622-7801

海外旅行センター 国内引越センター  
海外引越センター 国内催物センター



ひとつまたひとつ星がまたたき始めるように、  
劇場やオペラハウスに灯がともる。  
いい街にはいい音楽がある。



クラシック音楽のふるさとへ、  
ルフトハンザがおつれします。

古い街の伝統あるオーケストラのいぶし銀の演奏に酔いしれる。その一方では、オペレッタや人形劇、踊り子たちの美しいパフォーマンスに惜しみない拍手を送っている自分を発見する。音楽と芸術のふるさと・ヨーロッパを巡って歩く旅がすてきです。東京から週8便、大阪から週7便、名古屋からは週2便で計週17便。ルフトハンザならスケジュールにあわせてベストの便をお選びになれます。どの便も日本を発ったらノンストップ、同日午後の到着。ヨーロッパ国内の目的地への乗り継ぎもじつにスムーズです。最新鋭機で飛ぶ快適で安全な空の旅。いつまでも心に残る旅をルフトハンザでどうぞ。●インターネットをご利用の方は、<http://www.lufthansa.co.jp>をごらんください。



**Lufthansa**

※フライトのご予約は、旅行代理店でどうぞ。







招へい=中部日本放送

**CBC**

CBCオーケストラシリーズ#51